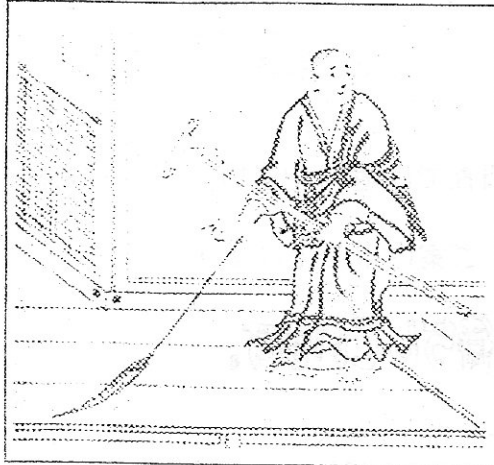


ちよつと

# 道具は語る 摂津市の昔の暮らし

## 鎌倉時代の棒ぞうきん



長柄の先に布をつけたモップに似たものを使って掃除していました。

布は麻とか栲（たく）を使用しました。柄は約 60cm 位でした。

『春日権現験記絵』  
「週刊朝日百科・日本の歴史 44」より。

郷土摂津  
いにしえ通信

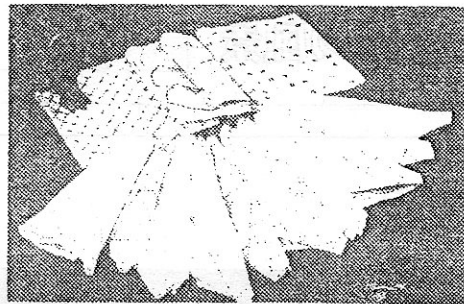
第32号

平成十二年十二月一日  
発行  
摂津市教育委員会  
生涯学習部生涯学習課

## 多彩な模様の花雑巾



木綿は麻や栲に比べて弱いため補強が必要でした。一目一目刺していきます。



少しでも暇があれば雑巾を刺しておくのが女性のたしなみでした。刺し方も色々工夫され、花雑巾と呼ぶような美しい雑巾も生まれました。

### 第8回 掃除 雑巾(ぞうきん)

古代から中世にかけては、棒ぞうきんが使われていました。貴族住宅にしる僧房にしる当時は広い板敷住宅でしたので、棒ぞうきんの方が合理的でした。文献によると室町時代から手で拭くぞうきんが使われたようで、「浄巾（じょうきん）」と書かれています。浄巾とは禅林用語で掃除用の布を示す言葉として使われていました。

おそらく使い古しの手拭いであったと思われる。手拭いは古くから「手拭ヒ（タノゴヒ）」と呼ばれて

いきました。家の形が変化して、貴族社会では畳敷きになったことで、掃除の仕方も変わり、手で拭くぞうきんの方が便利になりました。ぞうきんというものの持つ意味が変わってきますと、タノゴヒとはつきり区別する必要がでてきて浄巾という言葉が使われるようになったと思われます。江戸時代に蒲団や着物に木綿が多くなって、その使い古しを利用するようになってきて、浄巾から雑巾になったと思われます。

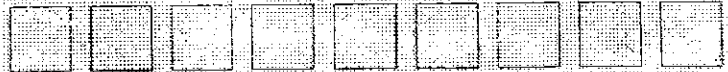
# 蜂前寺跡埋蔵文化財発掘調査 現地説明会のご案内

本年度実施しています蜂前寺跡埋蔵文化財発掘調査では遺物や遺構などが発見されています。つきましては現地説明会を開催しますので、ご案内申し上げます。

多数の方々のご参加をお待ちしています。

- と き : 平成12年12月9日(土) 午後1時~2時 (小雨決行)
- と ころ : 摂津市千里丘3丁目6番街区・摂津市立千里丘公民館前
- 内 容 : 中世(おもに鎌倉時代)の溝・太溝・柱穴など  
古墳時代から中近世にかけての土器など
- お問合わせ : 摂津市教育委員会 生涯学習課 生涯学習推進係 TEL06-6383-1111  
TEL0726-38-0007

## スケッチ・調査の風景



### I区検出状況



### I区・東西溝 半掘削状況



11月15日撮影



11月22日撮影

# 郷土撰津いにしえ

## 鳥養の歴史

### バス交通の開始

わが国は、第一次世界大戦中、思いがけない好景気に恵まれて繊維工業をはじめ重化学工業もかつてない発展をとげました。ヨーロッパの主戦場から遠く離れていたため、諸外国から軍需品の注文が殺到し、また欧米諸国の市場であった東洋諸国へわが商品が進出し、ひいては国内一般に非常な活況を呈したのです。ところが、大正七年（一九一八）十一月に休戦条約が成立すると、たちまち戦後不況に見舞われ、翌八年六月にベルサイユ講和条約が調印されると一時的な「カラ景気」もみられたが、九年には反動的恐慌に襲われました。そのうえ、十二年九月一日の関東大震災の打撃も加わって慢性的不況に陥つたまま、大正から昭和へ移っていききました。

大戦後の不況の中においても、大阪の工業は全国第一であり、林

立する煙突から吐き出す煙は大阪の空をおおいました。慢性不況下の十四年には、大阪港の貿易は開港以来の最高を記録しました。このような経済の発展が地方の人びとを大に膨張しました。十四年四月には、大阪市は隣接四十四カ町村を一挙に編入し人口は二一四八〇〇四人を数え、東京をしのいで日本第一位（世界第六位）の大都市となりました。大阪市民は、「煙の都」「大阪」と誇らしげに呼ぶようになりましたが、その一方では煤煙・騒音・水質汚染などの公害がようやく問題になりはじめていました。

大阪市の繁栄と膨張、それにとともなう郊外交通機関の発達に耕地の住宅地化・工場地化を促しました。大正九年から昭和五年に至る十年間に、大阪府下の田畑は五六七町歩も減少しました。現在の摂津市域を含む三島郡でも大阪市・北河内郡に次ぎ、四〇八町二反歩の田畑が姿を消しました。この面積は、昭和五年当時の鳥飼村全村の田畑とほぼ等しいものです。その多くは大阪市の

の発展による郊外住宅地や工場用地に化したのであり、同時にこの地域の土地商品化が進みました。

摂津市域の村々でも、鳥飼村は第一次大戦以来メリヤス工場が最盛期を迎え昭和二年には村域を通るバス路線が開設されました。

大阪市内にいわゆる青バスが走り出したのは大正十三年のことですが、昭和の初めになると、府下でもバス交通がクローズアップされ始めました。本市域においても、昭和二年に、二つのバス路線が開設されるようになりました。

その一つは、京阪自動車運輸株式会社が開設した大阪市内の長柄橋北詰から唐崎（現在の高槻市南部）に至る路線です。本市域内では淀川堤の府道上を運行しました。このバス路線は京阪電鉄の淀川岸進出策の一環として設けられたもので、六年に京阪自動車株式会社へ譲渡され、八年には長柄橋南詰まで延長されました。

他の一つは、茨木自動車（大正十五年創業）の茨木駅から島まで運行していた路線を鳥飼八町を通り鳥飼五久まで延長したものです。朝七時から夜七時までで四十分間隔で運行していました。

なお、このバスは後に、十七年に鐘淵紡績株式会社鳥飼工場の従業員運送用に買収されています。

二つのバス会社が鳥飼村に路線を開設したのは、いうまでもなく、鳥飼村は古来交通の大動脈であった淀川に沿って栄え、近くはメリヤス工場が盛業しており、本市域村々の中では最も人口の多い大村であったからです。



↑茨木自動車のバス



↑煙の都大阪

「摂津市史より」

担当 (名荷)

# 考古古雑話

第32回

## 撰津市と水田の考古学

### 撰津市域の条里制

#### 「吹田操車場跡地周辺の調査」(二)

前回まで説明してきました境川や坪境石のある千里丘東四丁目周辺から南西に下ったところに位置します吹田操車場跡地は、この地域でも条里制との関連が想定される発掘調査の成果があります。これからは、撰津市と吹田市にまたがるこの地域と条里制との関わりについて考えてみましょう。

吹田操車場跡地は、敷地の北側が撰津市、正雀川を境に南側が吹田市に属しています。それらの敷地のほとんどが周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）になっています。撰津市側が明和池遺跡、吹田市側が吹田操車場遺跡です。

明和池遺跡は昭和八年明和池（現在は埋立てられている）の底土から須恵器の丸底壺・坏蓋・坏身が完全な形で見つかり採集され

ています。これらの土器は現在、味舌天満宮に保管されています。

その後、昭和六十二年に大阪府教育委員会が明和池遺跡に隣接する庄屋一丁目の地を発掘調査し、弥生時代から戦国時代に至る七時期の堆積や各時代の溝・柱穴などの遺構、各時代の土器などが発見されました。特筆すべき遺物としては石帯の飾り（丸柄）・青磁・白磁・北宋銭などです。

近年の調査でも、明和池遺跡の調査は継続して実施され、その内容が判明しつつあります。

また、吹田操車場遺跡は、昭和四十二年に行われた場内道・水路工事の際に、中世の土器が発見されたことよって遺跡として周知されてきました。その後、平成十年度に大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施し遺跡の内容が判明しつつあります。

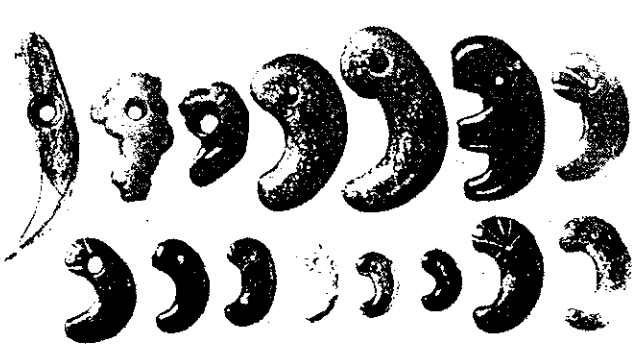
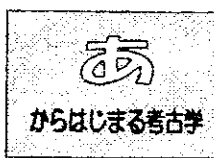
次号では、これらの成果をもとに条里制との関連について、説明していきます。（つづく）



上の写真は平成12年7月29日別府公民館で開催された夏休み体験学習講座『勾玉づくり』の写真です。古代風の服（貫頭衣）を着て勾玉をつくりました。石材は本物の硬玉とはいかず市販の滑石でしたが、きれいに磨かれ世界で一つの宝物になりました。

担当 (伊部)

「ま」勾玉(まがたま)  
 ○湾曲した体の一端に孔をあけた玉です。○『日本書紀』は勾玉、『古事記』は曲玉の字を用いていました。便宜上、孔のある部分を頭、他の端を尾といいます。頭の端に三から四条の線が刻多く丁字頭(ちようじがしら)勾す。○勾玉自に発達し縄文時代かあけて用いたのが原型であろうとされています。クマやオオカミなどの鋭い牙で身を守りたい、大事なものを身につけたいという願いがあつたのでしょうか。



いろいろな形の勾玉